

「どんなに人心が離れようと、里見の嫡流である以上、大義名分は我にあり」

義豊はそう断言した。

このとき義豊に従う主な者は、御傍衆とその家臣であった。兵力は限られているものの、敵の本陣を見極め、総大将である義堯を確実に討ち取ってしまえば、義豊の勝ちなのである。

「権七郎の居場所を探れ」

応と諸将は声を挙げた。

さっそく足の早い者たちが滝田城下へ潜伏し、義堯の居場所を探った。これが合戦の勝敗の鍵になるのだ。

四月一日、義豊勢は上総真里谷城下から安房へと進軍を開始した。久留里城はこれに備えたが、義豊勢はこれを迂回し、小糸城方面を経て木之根峠を越えた。

「敵が進軍して参ります」

その報せに、里見義堯はただちに正木勢をはじめとする同心者を招集するとともに、自らは宮本城から滝田城へと移った。

「恐らく敵は城攻めをするだろう。しかし、野戦を仕掛けられたら、防ぐ術はあるまい」

義豊勢が大掛へ押し出す前に、それを包み込むよう所要所へと軍勢を手配りするべく、義堯は采配した。

そのうえで、北条氏綱にも使者を差し向けた。いまの義堯は里見当主ではない。軍勢にも限りがある。悔しいが北条氏綱以外に頼る者はいなかった。

氏綱がこれに応じ、援軍が岡本湾に到着した頃、里見義豊も平群天満宮に軍勢を留めていた。この平群天満宮にて先勝を祈願し、義豊は夫婦楠木を見上げた。

「かくなるうえは、伊予ヶ岳の天狗の御加護にて、きつと早くに戦さが終わること望むものなり」

そう叫んで拍手を打った。

滝田城の美は涙滝に身を投じたという。これは義豊に絶望してのことだが、当の本人はそう

は思わない。辱めを逃れたのだと信じていた。早く戦さが済めば、戦火を逃れている妻たちを呼び戻すことができるのだ。早く戦さを終わらせねばならない。

「山間の地であればこそ、軍勢の動きには自ずと限りがございます。数ではなく、どちらに勢いであるかが勝機を分けますぞ」

そのように説く中里源左衛門の言葉に領きながら

「籠城には火矢である。まずは鎗よりも弓を持つべし」

と義豊は下知をした。

四月六日、この日は朝から風が強かった。

山間を吹き抜けていく季節風は、逆巻くように川筋の沿って南から向かってきた。それは山間を駆け上っていく。もし義堯が滝田城にいて籠城するのなら、たちまち焼き討ちに出来るだろう。奇襲に適する環境は整っていたといつてもよい。

このとき、斥候からは、未だ義堯の居場所を探る報せはなかった。

「待たなくてもよいので？」

本間八右衛門が問い質した。

「かまわぬ。権七郎は滝田に籠城しているとみて、儂の勘がそう云っておるわ」

義豊は軍勢を進発させた。

滝田城を焼き討ちにすれば、どのみち攻める側が有利に運ぶ。義豊はそのように盲信していた。

奇襲に逸る義豊勢は、一丸となって、平久里川に沿って滝田城へとひた走った。

大掛に差し掛かった、そのときである。

「敵襲！」

なんと、籠城策をとるものと思われていた義堯勢が、左右の山から押し出してきたのである。不意をつかれたのは、義豊側となった。

細長く行軍する義豊勢は、その柔らかな横合いを攻め立てられて、浮き足だった。そのため、前衛と後衛、それに本陣がそれぞれと、軍勢は分断されてしまったのである。

「殿が持ち堪えている間に、権七郎を！」

前衛の軍勢は滝田城下へと迫った。

探索する兵が義堯の居場所を特定するよりも

早く、彼らは逆に奇襲を受けたことになる。

「怯むな！怯むな！」

里見義豊は叫んだ。

十
十
十

犬掛へ（7）

夢酔 藤山